

2 児童生徒の問題行動に対する教職員の認識や対応を十分なものとする。

反抗的な態度をとる子，集中力に欠ける子，無気力な子，学校を休みがちな子，そうした児童生徒に教師である以上必ずぶつかるものである。そしてそのような児童生徒に教師としてどのように指導・援助したらよいか悩み，同僚の教師に相談してみる。これが事例研究会の第一歩である。

事例研究会は，様々な非行・問題行動，不登校等を解決する上で必要な諸理論や具体的な対応などについて学ぶとともに，教師間での活発な意見交換を通して共通理解を図るよい機会である。

○ 事例研究会

一人一人の教師が様々な非行・問題行動，不登校等についての正しい認識と基本的な姿勢，適切な対応の仕方等について，身に付けておく必要がある。

これらを学ぶ機会として，学校では，職員会議や職員研修会，学年会等の場を利用して行われる「事例研究会」が考えられる。

ここでは，インシデント・プロセス法について示す。

インシデント・プロセス法とは，発表された出来事を基に，参加者が次々に質問することにより事例の概要を明らかにしながら，事例の原因と対策を考えていく事例研究法である。発表された簡単な状況を示す出来事（インシデント）を基にして，問題の核心は何なのかを判断し，その解決策の決定を求められることから，模擬演習といった気持ちではなく，今まさに自分がその事例とかかわっているという臨場感が味わえるため，研修への意欲が増すとされている。事例の分析よりも，参加者による事実の発見に重きを置いている。



【参考】 インシデント・プロセス法を活用した事例研究会の進め方

1 インシデント・プロセス法活用の意義

- グループ討議を中心に行うことで、参加者全員の問題意識を高められる。
- 参加者一人一人が当事者の立場で考え、主体的で積極的な研修になる。
- 情報収集能力や問題発見能力、実行可能な解決策を立案する能力などを養うことができる。
- 実際に発生した問題を共有体験するため、いろいろな角度からの解決策が出やすい。
- 事例提供者は、資料作成等の事前準備をほとんど必要としない。

2 校内研修会の実際「インシデント・プロセス法による事例研究会」(60分)

時間	研修内容	形態	留意点等
5分	1 事例研究会の進め方、方法についての説明	全体	・ インシデント・プロセス法の特徴及び事例研究会の進め方、方法等について、参加者に説明する。
5分	2 インシデントの提示と情報収集 (1) インシデントの提示 ・ 事例について内容の把握、質問事項の検討	個人研究	・ 事例提供者は、出来事(インシデント)を発表する。 ・ 参加者は、インシデントを参考に、なぜこの出来事が起こったのか、状況を把握するためにはどのような情報が必要かを考え、質問事項を整理する。
5分	(2) 情報収集 ・ 質問による事例の理解		・ 事例提供者への質問は一問一答形式で、具体的な内容を聞く。 ・ 事例提供者への質問を通して、事例の概要・背景等について理解する。(記録カードへ記入)
5分	(3) アセスメント(見立て) ・ 背景等の考察		・ 収集した情報を基に、仮説を立てる。(記録カードへ記入)
5分	3 支援策の立案 (1) 背景等を踏まえ、指導方針、対応方法など個人で考える。	個人研究	・ 解決すべき課題等を考慮しながら、①本人に対して、②家庭に対して、③学校内でなど観点を焦点化し実行可能な対応策を考える。 ・ 対応策については、上記の観点別に色分けされたカード又は付せん記入し、整理する。
15分	(2) 指導方針、対応方法についてグループで協議する。	グループ研究	・ 5、6人でグループを編成し、観点ごとに協議し、対応策を集約する。(個人研究で作成したカードあるいは付せんを画用紙等に貼りながら整理していく) ・ 各対応策について、有効性、実行性を考慮しながら順位付けを行う。 ・ 順位付けされた対応策については、「何を」、「誰が」、「いつ」、「どこで」、「どのように」など具体的に整理し、援助カードに記入する。
10分	(3) 指導方針、対応方法についてグループの考えを出し合う	全体研究	※ 参加人数が少ない場合は、全体研究はグループ研究に含める。
5分	4 指導の実際と感想、助言 (1) 事例提供者の感想発表等	全体 事例提供者	・ すでに終了した事例であれば、実際に行った指導の過程や現在の児童生徒の変容を説明する。 ・ 現在進行中の事例であれば、現在までの指導の様子と感想を述べる。
5分	(2) 指導・助言者からの講評	全体 助言者	・ 今回の事例に対して、児童生徒理解や支援対策のポイント、留意点を助言する。 ・ 事例研究会についても講評を行う。
※ 事前の準備： 事例提供者を選出しておく。 事例提供者は簡潔に出来事の概要をまとめておく。 場合によっては指導助言者を招いておく。			

3 実施上の留意点

- ① 進行役は、参加者の質問によって問題の背景を探っていくため、積極的な質問を促すようにする。
- ② 質問は一问一答形式で具体的な内容を聞くようにする。
- ③ 質問は問題の解明を見いだすためのものであり、事例提供者を責めるような質問は絶対しないようにする。
- ④ 個人で考えている際でも、必要に応じて再度質問を認めるようにする。
- ⑤ 実例を扱うため、個人のプライバシーには十分に配慮する。

インシデント・プロセス法の校内研修を進める際に必要なインシデントの例、記録カードの例、援助カードの例を以下に示す。

インシデント(例)

中学1年生Aは、B、Cと3人で休日や放課後に一緒に遊ぶ等、行動を共にする友達同士である。小学校までは共に仲良しであったが、一か月前、いつものようにA、B、Cの3人が公園に集まり、しばらくゲーム等をして遊んでいたところ、ささいなことから言い合いになり、AとCがけんかを始め、殴り合いになった。Aは頭にこぶができ、Cは唇がはれ、口の中を切るけがを負った。この日以降、BとCはAを無視するようになり、このことがきっかけでAは不登校になった。

記録カード(例)

情 報 収 集	本人	<ul style="list-style-type: none"> ・ 友人から無視され続けている ・ Aを思いやる友人がいない ・ 関係の修復に自信がない
	家庭	<ul style="list-style-type: none"> ・ 父親は厳しいが、単身赴任中で、子どもとのふれあいがもてない ・ 母親によく甘える
	学校生活	<ul style="list-style-type: none"> ・ 国語、英語は得意であるが、数学は苦手としている ・ 特に目立った活動ぶりではないが、係の仕事はしっかりこなす
	その他	
問題 の 背 景	<p>○周囲(友人・学級集団)の問題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ いじめに対する認識が不足 ・ 相手の気持ちになって考える雰囲気がない ・ クラスにまとまりがなく、リーダーが不在 	事例提供者への質問により必要な情報を記入しまとめる。
仮 説		得られた情報を基に仮説を記入する。

援助カード (例)

順位	具体的対応策 (何をするか)	誰が	いつ	どこで
1.	*本人 本人の今の気持ちをしっかりと受け止め、今後どのようにしたいのか一緒に考える。	担任	放課後	家庭訪問をして
2.	友達とかかわるときに必要なソーシャルスキル (あいさつをする、誘う、断る) などを具体的に教えて、対人関係上の不安を取り除く。	養護教諭	昼休み	保健室
	*家庭			
	*学校生活			
	*その他			

実行可能な対応策について検討し、順位付けを行う。原因や背景を踏まえ、指導方針や援助を考え記入する。

誰が、いつ、どこで対応するのか、具体的に記入する。

事例提供者用持ち資料カード (例)

平成〇〇年〇月〇〇日現在

生徒氏名	1年 □組	Ⓜ・女 出身校 (××小学校)
【インシデント】(問題の概要)		
<p>中学1年生Aは、B、Cと3人で休日や放課後に一緒に遊ぶ等、行動を共にする友達同士である。小学校までは共に仲良しであったが、一か月前、いつものようにA、B、Cの3人が公園に集まり、しばらくゲーム等をして遊んでいたところ、ささいなことから言い合いになり、AとCがけんかを始め、殴り合いになった。Aは頭にこぶができて、Cは唇がはれ、口の中を切るけがを負った。</p> <p>この日以降、BとCはAを無視するようになり、このことがきっかけでAは不登校になった。</p>		
本人に関して	出席状況	
	保健室等の利用	
	授業の様子	
	性格	
家庭	家族構成	
	家庭(保護者)の様子	
学校生活	友人関係	
	部活動委員会	
	学級や担任との関係	
特記事項		

(引用 県総合教育センター研究紀要第110号より)

記録カード(例)

情報 収 集	本人	
	家庭	
	学校生活	
	その他	
問題 の 背 景		
仮 説		

援助カード (例)

順位	具体的対応策 (何をするか)	誰が	いつ	どこで
1	*本人			
2	*家庭			
3	*学校生活			
	*その他			

事例提供者用持ち資料カード (例)

平成 年 月 日現在

氏 名	年 組	男・女 出身校 (学校)
【インシデント】 (問題の概要)		
本人 に 関 し て	出席状況	
	保健室等の 利 用	
	授業の様子	
	性 格	
家 庭	家族構成	
	家庭 (保護者) の 様 子	
学 校 生 活	友人関係	
	部 活 動 委 員 会	
	学級や担任 との 関係	
特記事項		

(引用 県総合教育センター研究紀要第110号より)